

<いじめ問題に関する事例>

① 保護者からいじめの訴えに対する学校の対応が不十分と言われている。

「子供がいじめられているように思うので、調べてほしい。」と、Aさんの保護者から担任に相談があった。担任も、Aさんが仲のよかった友達と一緒にいないことが気になっていた。それぞれの子供から事情を聞くと、Aさんは仲良しだった友達が周りからいなくなってしまうという事だった。他の子供たちからは、運動会の係分担でAさんだけが人気のある役割になり、それをAさんが自慢したことから、Aさんと距離を置くようになったことが分かった。

学校としては、いじめというよりも、成長の過程での人間関係のトラブルと捉え、互いの了解の下、Aさんと他の子供たちとの話合いの場を設け、Aさんは自慢したことを謝り、他の子供たちは距離を置いたことを謝り、再び一緒に行動するようになった。

ところがその後になっても、Aさんの保護者から、「学校としていじめを認めろ、臨時保護者会を開いて経過を説明しろ。」という要求が続いている。

我が子がいじめられているかもしれないという保護者の不安な思いを受け止めて、学校が早急に対処をしたことで、子供同士の人間関係は回復しています。それなのに、まだ保護者からの要求が続いていることに対して、どのように考えればよいでしょうか。

学校としての取組みが保護者にうまく伝わっていないのか、仲直りしたように見えるAさんと他の子供たちの関係が実はまだ完全なものではないのかなど、いろいろな事情が想像されます。

ヒント1 保護者の不安を解消する。

- ・ Aさんと他の子供のトラブルの原因や、その後のやりとりで子供同士は仲直りしたということが保護者に伝わっていない可能性があります。
- ・ 学校は保護者に対して、学校としての事実確認の報告やその後の対応についてどれくらい説明をしたかを振り返り、不足があれば補います。
- ・ 保護者が不安に思うことを確認し、学校として対応できる部分については取り組みながら子供の状況について伝えるとともに、必要に応じて保護者にも実際の子供の様子を見に来てもらうなど、一つ一つ不安を解消していきます。

ヒント2 Aさんの保護者の要求に応じるかどうか判断する。

- ・ Aさんの保護者が要求している具体的な内容の背景にある考えを聴き、気持ちは受け止めます。
- ・ 一方で、子供同士の話合いで誤解が解けて関係がよくなっている子供たちに対して、「あれはいじめでした。」と大人が一方的に断定することについて、子供たちへの影響を心配していることを伝えます。
- ・ 臨時保護者会を開くことは、保護者間でうわさになり曲解されて広まる可能性があるため、学校としては定例の保護者会等で今回の件を踏まえて説明するつもりであるなどの方法を示すことで、開催しないことの理解を求めます。

ヒント3 子供の援助に視点を移す。

- ・ 学校として大事なことは、現在は子供たちが元気に登校していることです。今後も子供たちの人間関係を注意深く見守り、必要に応じて指導をしていくことに重点をおきます。
- ・ 保護者に対しては、いつでも相談に応じるようにして話を受け止める機会をもつとともに、学校からは子供の学校での生活ぶりを伝え、保護者に安心してもらう情報を増やしていきます。

【学校の対応とその後の状況】

- ・ 担任と養護教諭が保護者の話を改めて何う時間を設定した。保護者は子供同士が仲直りしていることは理解しており、学校が素早く対応してくれたことについては感謝の言葉があった。
- ・ そして、自分が子供だったときに同じようなことがあり、表面だけ仲直りしても、大人の見えていないところでいじめが続き、大変つらい思いをしたことを話し始めた。
- ・ 養護教諭が、保護者の当時つらかったという気持ちを受け止め、この学校ではそういうことにならないように努力したいと伝えた。そして、気になることがあったらいつでも話に来てほしいと付け加えた。
- ・ 担任からも、今回のことは、子供同士が自分たちの話合いで問題を乗り越えたと捉えていること、これを学校が「いじめだった。」とすると、子供たちの気持ちを踏みにじるだけではなく、周りの大人たちに対する不信感も生じるのではないかと心配することを話した。
- ・ 保護者は「少し時間をください。」と言ったが、その後この件にかかわる要求はなくなった。